

人間の特権としてのおしゃべり

語る人
立川談志



第一章

おしゃべり時代



沈黙は損なり

——きょうは「おしゃべり」ということをテーマにして大いにしゃべっていただくと思います。

おしゃべりってやつは、あんまりよくねえなんて言われてきたね。「沈黙は金」なんて。

——近ごろはそれがだんだんかわってきているでしょう。

沈黙は損なりっていうね。たしかにそうだ。ただ、今後はまたどうなるかわからない。しゃべるのにあきちゃったわれわれみたいな仲間があつまると、単語が二十くらいしかない。それだけで通信しあっていたりするね。

だけど、今は、たしかにしゃべるのはたいせつだね。だから大学で落語研究会なんてとこへはいつているやつは、就職率がいいんだってね。

—人間関係をうまくつなげるというわけですか。

—そう、くだらないこと言って笑わせてりしてね。笑うってのはいいことだね。

へたもまたよし

—そうですね。でも、笑わせてやろうなんて考えてやるのは邪道じゃないですか。

—そんなことないさ。いいことじゃないか。笑わしてやろう、やろうといつも考えてるなんてのは、すごくいいことだね。

—ただ、笑わせようというのがあんまりめだつとかえっておかしくないですかね。

—そういうことはいえるね。何でもそうだけど、気持が出なくちゃね。

—落語にしても、前座さんのなんか、何となく歯がうくようなのがありま

—すね。
それはありますね。何だいまりやあ、なんてのが。ところがね、聞きこんでくると、変に硬化しちゃったのより、そういうのがかえっておもしろくなったりでね。今の時代はそういう時代ね。完成したものより、動いている方がおもしろいや、なんてね。そうでなきゃ、オレの方が名人より客が来るなんてことは考えら

れないもん。むこうの方がうまいんだ。

ユーモアのすすめ

—しかし、味のある話というのはあるでしょう。

—ぼくは好きですよ。しみじみとしゃべって味があるというふうなものね。江戸っ子にはいい会話するのがあるよね。

—やっぱりユーモアのある会話というのがぼくは好きだね。ユーモアってなんだっていったら、おのれを客観的に見る目、ということだね。つきはなしてみられる。

—この間、沖繩で主席公選やったとき、沖繩から中継放送していたね。基地の全面撤廃はいいけれど、働いている人間どうするんだ。あのこと考えなきゃ困る、というから、なるほど、あのこと考えなきゃ困りますなあ、やめるだけやめさしちゃって、赤線とおなじだよなあっていったら、カンカンに怒った。そりゃ、わかりますよ、怒る気持は。しかし何も政治を赤線だといったわけじゃないんだ。(笑)

—アメリカが、真珠湾でやられたとき、本國へ打った電報が、ご承知のとおり「真珠湾攻撃さる、ただし演習にあらず」ってやったんですよ。日本なら非国民だなんだって、たいへんなさわざだよな。

—ニクイ表現ですね。

—どう表現したっていいじゃないかということだよ。それがわからないカタイ頭じゃ何にも創造は生まれねえや、ということだよ。

会話では許しあう

—日本人はまだまだそういう点はダメですね。客席みたいな特別の場ではわかるんだけど……。

—テレビを通すとわからなくなっちゃう。ぼくなんか、そういう調子で人にも話しかける。それで毒舌なんていわれる。毒舌ってのは、それがあつたり、しやれがあつたりで、いいものなんですよ

ね。会話の上ぐらいいは、許しあつたっていいじゃないか、ということですよ。会話というのは人間だけが楽しめるものです。どう表現したっていいのに、怒るんだよね。

—国会で横山ノックさんが、首相を「栄ちゃん」といったというので、問題になりそうになりましたね。国会なんか、もつと思いつつてなかなかできないでしょうかね。

—この間も、新宿の駅で、中年のサラリマンが、電車におしこめられて叫んでる——「無理におさなくたっていいよ。オレは会社でそれほど重要な人物じゃないんだから」(笑)——そう言つてたつていんだだけだね。

—会話のよさみたいなもの。大阪にはま



だそれがありますよね。東京にはないね。江戸にはあったんだけど、なくなっちゃったんだなあ。

しゃべるってのは、いいレクリエーションですよ。江戸時代には、会話なんだから、相手をゆるしあうというのがあったんだけど、戦争のたかたかなくなっちゃった。「上官に向かって何を言うか」——上官にむかって言うからおもしろいんですよね。

いいたいことを言う

——いまでは、学生が先生をつるしあげたりしている。

そう、だからおもしろい。落語ですよ、あれはまったく。だいたい、先生が生徒をなぐったもんだ。それは今は、生徒が先生をなぐる。いい、悪いは別として、これは落語ですよ。落語の本質をつけています。落語というのは頭の中で考えるだけだ。ところがむこうは実際それをやってるんだから。あれを見たら落語よりむこうの方へいくと思えますね。

——どうも、立場のちがったもの同士では、なかなかうまくしゃべれない、ということがありますね。

ありますね。去年、有馬温泉で火事がありましたけど、気の毒だ、温泉の設備が悪い、という前に「バカヤロ、温泉なんかでうかれてるから焼け死ぬんだ」

味のあまじいこと

勉強しなきゃあ

いけませんよ

師匠はしたんぞですか？

いやアタシも

しなかつたけどさ



という人がひとりぐらい、いたっている。いるはずですよ。もちろん、親や親セキが死んでいる人にむかって言った、けんかになるかもしれないけれど、ここで話してる分にはどう表現してもいいよ。本気で考えてないようなことを言うよりはねえ。日本人は「じゃ、焼け死んでいいの？」とすぐ、こう言っちゃまうわけよ。オレは火事が好きだ、というところ「じゃ、お前のうちがやけたらどうする」と来る。自分のうちが焼けるのは火事じゃなくて「不幸」だ。自分じゃなく

たって、やけだされた人は気の毒だ。それとね、夜おそくまで、もえるのを見ているのはちがうんだ。

——この間の三億円強盗なんかも、落語的ですね。

あれなんか、不幸なやつがだれもいない。みんなカラッとしてたでしょ。ああいうのはいいですよ。

足のひっぱりあいはつまらない

この間ね、農林省の食堂だから、牛乳を安く飲んでというのが問題になりましたね。みんな怒ってるわけだよ。ところがその怒り方がね、やつらだけ飲んで不当だ、安く飲ませるな、というんだよ。それがいやなんだな。安く飲ませるなという前に、おれもそのうまい話にのせてくれ、というんないいんだよ。(笑) その根底にあるのは、あいつだけいい思いしている、おもしろくない、オレたちといっしょにしちゃえ、——そういう神経が日本人にはあるね。

ね。

いきなおごと

——話し家の師弟関係はどうですか

会話は、規律はあるけれど、呼吸さえのみこんでしゃべればいいですよ。こことなんか、こことそのものが芸だね。話術の極致みたいなものだね。もともと知らないやつが聞いたら、なんだだらしがいない、ということになっちゃうだろう。

「おまえさんは、もつと勉強しなくちゃいけませんよ。あすんでばかりいて。」

「師匠はどうだったんです？」
「え、そりゃ、あたしもしなかったけどね。」

「どうも、しまりがいいんだよね。それはね、てれもあるし、こつちへの救いもあるわけで、「何だ自分もしねえで、何いってやんでえ」と思うやつはひとりもない。ルールをこころえているから。」

「———ごとはだいいぶちようだいたした方ですか。」

ああ、もう、めつちやくちや。こごと右代表みたいなもんだね。
いきな会話、というのが自分でできなかったら、せめてそれをわかるようになるだけでもいいと思うね。落語には、そ

うした期待をみたしてくるものがあるわけですよ。

おしゃべりプロの精神

———この間しばらく前田武彦さんと、しゃべりあう番組に出ていられたようですけれど、どうですか、ああいうのは。

前田さんはあれでずいぶん売れたでしょう。が、前田さんは何ていうか、やはりアマチュアだね。おれを許さないんだ、最後まで。道化になれない。それを知っているがなれない。彼がやられた方が、受ける場合もあるんだけど、絶対やらない。ぼくが受けないと次に話



が進展しないから「こりやまいるな。とくにね……」と、こりやる。だが、みるやつは、何だ談志はやられてばかりいて、という。見るやつが見れば、「よくお前は受けにまわってるね、ボケ」なんてね。ボケにならないと進展しないんだな。前田さんもそれは知っているんだけどできない。それがプロとアマのちがいないんだな。
「笑点」でも、堂々とやられてる。しかしあのへんの連中は、みんな平気なんですよ。つまり小田遊にむかって「何だい、真打ちってのは順番だそうじゃねえか」とかね。円鏡なんかバラバラにしても平気ね。くすぐるんじゃなくて、裸にしちゃって、本当に円鏡の本質についても怒らないからね。お腹の中までわかってる。「あーい、あたりノ」なんていつてるからね。「どうだい忙しいだろう」

第二章 現代落語論

「しゃべる芸」修業

「しゃべる芸」といったものについておききたいんですが。

俗に話術というものかな。そうねえ、しゃべるに無理に芸をつけるとね、聞いていられないような場合もあるしね。その人の形式ができていれば、それでいいんじゃないかなあ。トットツとしゃべる人はトットツとね。その人なりの形式が

できていれればいいんじゃないですか。

——落語家というのは、しゃべるのが商売ですけど、入門して修業されるときに、師匠からどういうことを一番言われるんですか。

たいへんまちがったこと言われますよ。人間形成がまずだいじだとか、心のやましいやつは落語家になれない、とかね。(笑) じょうだんじゃないってんだよ。こっちは何も神さまに殉じようってな料簡じゃないんだからね。

——落語には台本はないんでしょう。どうやっておぼえるんですか。

師匠の前にすわりましてね、師匠がべらべらとやる。それを一言半句まちがひなくおぼえる。

——とくべつ記憶力のいい人がやってるそうじゃない。慣れたな。みんなおぼえてるもの、ウストラばかみたいなのやつが。

落語という「かたち」

——話しかたそのものについては、どういうふうな指導されるんですか。

それはもう、師匠のやるように、その通りにしゃべれ、ですよ。落語にやっぱり落語の形式があるでしょ。形式をとっぱらっちゃって「おまえの好きなようにしゃべれ」じゃ、最初はやっぱりだめ

だよ。本来、芸というものは、その人もっている内容を、その人の話術でこなしていく、そのバランスがとれているのが一番いい芸といえるんでしょう。落語っていうのは、だれしも知っている、あの「おい、八つあん、こっちへおはいりよ」という形式を通して語っているわけね。それを通さないで語って見たらどうだろうというんで、弟子に、そうした形式を教えないで育ててみようと思うことはあるんですがね。こりやものになりやうと、離れるのがむずかしいですよ。何やっても落語家口調じゃないかってことになる——ものにならなきや、こりやあかわいそうで、型なしになっちゃうからね。

落語口調でも何でも、それなりにひとつの形式をおぼえときゃあ、不器用なやつでも、バカでもチョンでも何とかならんんじゃないかというんで、弟子に教えることについては、僕にも心の葛藤はありますからね。

ぼくらの場合は、そんなことはなしに、ただ教わっただけです。赤ん坊と同じで「ここにあるのは雑誌」「ダッチ」「ダッチじゃないのざっしし」というやつですよ。おぼえたあとでは、いろいろわかることもあるでしょうが、最初はともかく「ざっしし」とおぼえさせることですよ。

——とにかく同じようにしゃべれ、というの、あらっほいようだけど、型をおぼえさせるという点で、案外いい方法なんです。だって、子供にとってはまねることが創造でしょ。だから、ぼくはそれでいいと思ってるんですよ。

戦後形やぶりの落語がおおはやり



かたちを破るころみ

——で、そのものまねみたいのをどのくらいやるわけですか。

ものまねはまず十年。本当はできれば三年から五年ぐらいでやめてもらいたいな。ところがお手本がすばらしいものだから、それ以上自分の形式ができない。だから十年も二十年も、いわゆる落語の

うのは、あらっほいようだけど、型をおぼえさせるといって、案外いい方法なんです。だって、子供にとってはまねることが創造でしょ。だから、ぼくはそれでいいと思ってるんですよ。

——今までの型を破りだそうとするうろこきが出てきた。

いやいや、破り出してないんだ、全然。客も、芸人も。しかし、破りださなくちゃ、落語は滅びるんじゃないか……。——いわゆる昔風の落語に対して、今いろいろ新しい、型やぶりたいいな、三平さんのようなのが出てきていますね。三平さんにしても、昔風のを教わったと思うんですが、それをぶちこわしてしまっただけでしょう。それでもまだ破っていることにはなら

ないわけですか。

あの人の場合は破っていることにはな
るでしょう。でもね、あの人は表面は破
ったが、内面的なものは全然破ってはい
ないんだからね。彼を頂点とする新作落
語はね。内面的にいうなら、あれは落語
じゃなくて「笑話」だね。落語ってのは
あんなものじゃない。もっと生命の謳歌
であり、もっと人間の生活の本質をつい
ているものがあるわけでしょう。そこま
で、しよせんいつてない。形式として
は、アコーディオン使ったり、立ちあが
ったり、わめいたりまちがってみたり、
いろいろやぶってるだろうけれど、内面
的には何も破っていない。両方で破っ
ていきたい。できれば内面的なものを破る



——というより、新しいのをこさえてい
きたいんですけどね。

——いままでの落語のかたち、あれはど
ういうふうにできたんでしょう。

あれはね、円朝以後だろうね。円朝の
弟子あたりが作ったんじゃないかな。

——当時のしゃべり方の結晶といったも
のですね。

うん、それに役がらをきめちゃった。
八つあんがいて、熊さんがいて、与太郎
つてのがいてね。

——そういうオーソドックスな落語をや
る人はへってきているのでは？

度合の問題だな。へってるといえば、
昔のようなしゃべり方をするやつはひと
りもないといえるし、また、落語に名



を借りて、みんなそれぞれ自分の世界を
出してるんで、現代の口調でしゃべって
るんだから、落語ってのは一番前衛だ、
という見方もあるしね。

落語世界と時代の波

ただぼくが心配なのは、今の落語のか
たちじゃ、持たないような気がするな。
種類もこれ以上増えっこないですか
ね。

——落語の世界、ご隠居さんがいたり、
そこへ八つあん、熊さんが出入りす
る、といった世界を理解するような
生活の基盤がだんだんなくなってる



ているでしょう。だんだんわからな
くなってきませんか。新しいギャグ
をつけ加えても限度があるでしょ
う。大すじまでは変えられない。変
えてもほんとはいいんですかね。

ただ、時代劇というのは、相かわらず
なくならないでしょう。それなら、落語
というのもあっていい。わからないた
って、そんなにわからないことやってま
せんよ。

吉原なんてのも、若い人にもわかりま
すよ。実物は、ぼくだって知りやしませ
ん。しきたりだとか何だとかは、商売だ
から知ってますけど。お客さんは知らな
くてもゲラゲラ笑ってますよ。何でだ
といたら、男と女のかつとうだからです



立川談志氏

落語家。本名は松岡克由。一九五二年柳家小さんに入門、六三年、談
志を襲名して真打となる。若手落語家のホープ、司会などにも活躍。
著書に「現代落語論」ほか。

よ。吉原を舞台にしたって、男と女のたましっこ、キャバレーやバーとおなじです。ただ、これはわかる、わからない、というカンミたいなもの、そのカンに方法論をつけてやりたいと思うな。

——多くの落語の中から、時代の波に淘汰されて、わからないのは消えちゃったわけでしょう。

そうね。ただ、様式はいいのが残っているから、新しいテーマをもちこんで、もう一べんやってみよう、というようなものもありますね。リバイバルでね。

「うどん屋」の永遠性

「うどん屋」という落語があるんですよ。うどん屋が夜の街を流して歩く、するとよっぱらいが来て、クドクド話をする。これは、落語によくある笑いですよ。そのよっぱらいは婚礼のかえりなんだ。昔、近所で鼻みずたらしてた女の子が、娘になってヨメにいった。そこで、婚礼にいくと、上座にすえられて、手をつけて「おじさま」といわれたとき

にゃあ、おれはなみだが出た、こんなめでてえこたあねえや、なんてのを涙ながらにしゃべる——そんなのをいま一生けんめい描いたってしょうがないでしょう。

子がやったらモロに感じるんだ。なぜ、師匠のいいかというところ、つまり様式美だな。冬の夜寒が出て、とかね。よっぱらいに對するうどん屋の顔とかね態度とかね。全然ちがうところでもってわけよ。

うどん屋も昔と今じゃずいぶん変わっててでしょう。昔は七輪で火をおこしてたのが、今じゃプロパンか何かかもしれない。でも、そこに人間がでてきて生活があれば、そういうものは今も昔も変わらないわね。道具だてなんか関係ないんだ。

そこにある人間像だよ。それじゃ、うどんを売りにくることまでわかんなくないか、ということもありませうが、それはわかると思うな。むしろこのわいの、何を描こうとしてんのかということ、内面的なものだよ。

人間の本性への共感

ぼくがきょうやった「小猿七之助」なんて話の、主人の金をぼくちですっちゃ

ったという男を助けるなんてところに共感があるわきゃないんだよ。親を助けるために人を殺すなんてのも、今の世代にはしよせんわからない。時代がもっと進歩して、みんな人工子宮かなんかで育つようになる、「親のために命をすてるなんてのはいいねえ」と逆になるかもしれないけど。 (笑) だから、あの話は、ただ再現するだけだ。月が出てきて、雨がふってきて、大川にアイクチがきらっと光ったなんて思わせるだけだ。

——いわば一幅の絵ですね。
絵だね。しかしそれじゃあね。やってはいけないことなんです、あんなことは。

——時代なんかとびこえちゃって共感できるところが落語のよきですね。

超越してんですね。若いのが大勢集まるとうかしてタダで飲もうか、とか、湯屋の番台にのぼってみたいなんていうのは永遠の夢でしょう。(笑) かりに湯屋がヘルスセンターにかわっても同じだと思わね。ヘルスセンターなんてのは様式としたら昔のものどっつていられるわけでしょう。上へあがってしゃべれて、本がおいてあって、湯女がいて……。人間の本性はかわらないってことです。

